

## OECD Education2030 プロジェクトから考える学校教育の未来

～「エージェンシー」を育てるために私たちができること～

シンポジスト

堀江 未来（立命館大学グローバル教養学部教授・立命館小学校校長）

井上 志音（灘中学校・高等学校 国語科教諭）

コメンテーター

白井 俊（内閣府科学技術・イノベーション会議事務局参事官）

コーディネーター

荒木 寿友（立命館大学大学院教職研究科）

荒木 教職研究科の荒木と申します。よろしくお願ひします。シンポジウムの進め方ですが、最初に堀江先生のほうから報告していただきます。その後、井上先生に報告していただきます。その後、白井先生から発表につきましてのコメントをいただきまして、登壇者のほうで白井先生の基調講演も踏まえましてディスカッションをしたいと思っております。その後、フロアのほうからのご質問等を交えましてディスカッションをしていくことができると考えております。このような形でシンポジウムを進めることを予定しております。

それでは早速ですけれども、堀江先生のほうからご発表のほうをよろしくお願ひいたします。

### 立命館小学校の新しい学校づくり

堀江 皆さん、こんにちは。よろしくお願ひします。立命館小学校校長の堀江未来と申します。もう一つ、立命館大学グローバル教養学部でも教員をしまして、今は生活の大体1週間のうち1日だけは大学の授業を教えていて、残りの日は校長としての仕事をしているという感じになります。きょうは立命館小学校の新しい学校づくりということで、この間、特に2021年度ぐらいからずっと頑張って試行錯誤をしながら進めてきた学校づくりの事例についてお話をしたいというふうに思

います。先ほど白井さんのお話をいろいろ伺っていて、あらためてこのやり方は間違っていなかったなということや、すごく後押しをいただいたなというふうに思っています。詳細はまたこの後お話しします。

まず自己紹介をしますが、私自身は教員免許を持っていない立場で校長をしています。校長だけは教員免許、いらならしいですけども、もともと名古屋大学教育学部で教育学の勉強をしました。ここは教職免許を取ることが目的の教育学部ではありませんでした。私自身は当時出会った留学生、1980年代なんですけれども、海外から、当時物価が高い時代に世界中から非常に高い意欲を持って日本に留学してきている人たちと出会いました。そこですごく刺激を受けて、私自身も彼らとの関わりの中でもっと成長したいなということやを思いつつ、中国に留学する機会を得ました。1990年なので今の中国とは全く違う時代なんですけど、その時代に1年間、南京大学で過ごす機会を得まして、異文化に触れて人間が成長するっていうことにもすごく興味を持ったんですね。

私自身は日本で、今、思うと日本の高校生として非常に羽を伸ばしきれないというか、少し窮屈な思いをしながら、日本の社会から自分に向けられる、女の子はこうすべきだとか学生はこうある

べきだみたいな、そういう枠がちょっと窮屈だなと思っていたところでもありました。その流れで留学した中国は、性別だったりとかジェンダーだったりとかそういったことも関係なく、自分がやりたいことをやりたいと言って推し進めていく社会でした。逆にそういうことができないとうまく社会で生活できない、そういう環境を急に経験しました。そのことが自分の成長にプラスだったと思って、その現象をそのまま研究しようと思いました。

当時、日本ではこういったテーマを専門で勉強できる教育研究科というのはあまり見つからなかったんですね。私の指導教官だった比較教育学の馬越先生は、あなたは世界中どこでもいいから行って学びなさいということで、ミネソタ大学に素晴らしい博士課程があることを見つけて、そこで「異文化体験から学んで成長するとはどういうことか」という研究をしました。そのときに国際教育のミクロとマクロの両面、つまり、個人が異文化に触れてどう成長、変化していくのかということと、そういう環境をつくり出すためにどんな政策が必要なのかとかどんな学校づくりが必要なのかという教育行政の観点と両方から学んで、博士を取って帰ってきました。その後はずっと日本の大学で、特に大学の国際化を推進するような仕事をしてきました。主に国際教育の研究と教育実践をしてきたわけですが、2017年からは、立命館小学校、中学校、高等学校の代表校長として、大学教員と校長を兼務しました。1週間の中で今日は小学校の日、今日は中高の日、今日は大学の日みたいなことを繰り返しながら4年間を過ごしました。

ところが、コロナ禍がきまして、校長の仕事の優先順位ががらっと変わりました。当時はこちらかというところと小学校と中高をつないで、12年一貫教育をより豊かなものにしていくことが最優先にあったわけですが、コロナ禍になりますと、それぞれの学校の安全を守ることが最優先にくるわけですね。そうすると1人の人間が両方の学校を見るということちょっと無理が出てきましたので、2021年から私は小学校専属の校長として仕事をするようになりました。

今日は、その2021年度以降の、小学校校長として経験したことを話をするんですが、観点としては、組織論的な話になります。これは、私自身が2021年から一番自分の目標としてやってきたことでもあります。つまり、新しい学びを支えるための、新しい組織文化を創っていきたいということです。皆さんの所属している組織それぞれに歴史があったり、文化があったり、独特の風習や習慣があったりすると思います。組織って、出来上がったばかりと10年後と20年後で、そのあり方が変わってきますよね。立命館小学校が2021年当時どのような辺りの組織にあったかというところ、まず、2006年に立命館小学校が開校しました。新しい学校ができるということのはみんな明確な目標を共有していて、こういう学校をつくっていきましょうということが枠組みとしてあって、それを実現させることに注力をしていく。そのことで学校がうまく出来上がっていくところから始まったと思います。ただし、組織って最初に提示された形のままでずっといけばいいかといえばそうではなくて、10年ぐらいたった辺りでは、これからは自分たちで変革を起こしていける、組織として内発的に自らを更新していけるような、そういう組織文化をつくっていかないと、組織が次の段階に成熟していかないと考えました。そのときに必要だと思ったことが、トップダウンからボトムアップ、ミドルアップへの組織文化の変更、これを何とか実現したいと思いました。

そうすると、まず必要になってくることは、教職員の一人ひとりが安心して力を発揮できる環境をつくる、つまり心理的安全性を高めるということでした。手前みそになりますけど、立命館小学校って本当に先生方の教員としての力量が高いんですね。それぞれに得意な分野があって、もちろ

新しい学びを支える新しい組織文化を作っていくために

「トップダウン」から「ボトムアップ・ミドルアップ」へ

- 教職員の一人ひとりが安心して力を発揮できる環境（心理的安全性）を
- 教職員の一人ひとりが学校づくりの当事者として活躍できるように
- 校長のあり方として
  - 参加型リーダーシップ・Inclusive Leadership・Servant Leadership・Authentic Leadershipなど

RITSUMEIKAN
FUTUREZ

ん得意じゃない分野もあります。その得意な部分を安心して発揮できて、自分の学校をこうしていきたいという意見を出し合うことができること。もちろん、意見が対立したりとか違う意見が出ることもあると思うんですけど、そのことが建設的な議論につながっていくような、そういう組織文化をつくりたいと思いました。つまり、教職員の一人一人が学校づくりの当事者として活躍できるようにしたいということです。

トップダウンで政策が示され、それに向かってまい進していくというのも一つの学校の形だと思うんですけども、先ほどの白井さんが紹介されたシンガポールの例にあったとおり、トップダウンで指示しても改革はできないっていう、まさにそのとおりだなと私は思うんですね。トップダウンで言われたことをやるだけであれば、その形は変わっていかないわけです。何とかミドルアップ、ボトムアップの形を作っていくためには、先生が一人一人がまずは学校づくりの当事者であるということを安心感とともに信じて動けるようにする。そのことを強化していきたいというふうに思いました。

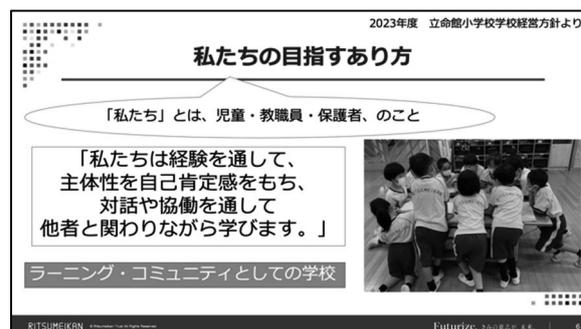
では、そのときに校長はどうあるべきかというふうに考え、私自身の性格やそれまでの経験からも、参加型リーダーシップとかインクルーシブリーダーシップといわれる、その構成員が主役であるという形をできるだけ取りたいと思いました。もちろん私自身が何らかの決定であったりとか政策の責任を負うという意味では同じなんですけれども、先生がたの力を引き出す、強みをちゃんと生かしてもらえよう環境をつくっていく、その態度を徹底しようというふうに考えました。

そう思っているんなことを試行錯誤してきたわけです。そこは省きますけれども、例えば2023年度、今年度ですね。今年度の小学校経営方針ではこんなことを言いましたということの一部を紹介したいと思います。これは毎年、年度の初めに小学校の学校経営方針として先生方にお話しするものです。ちなみに、これはおそらく校長の個性が出るところで、人によってはレイヤーもカテゴリも内容も違うものが出るのだと思います。私はコンテンツよりもプロセスを、結果よりも考え方や姿

勢を重視した提示をしてきました。

私が今年度最初に出した言葉が「対話と協働」です。対話と協働、これは後でご紹介しますが、これから私たちが立命館小学校で実現していきたいと思う学びの形に一番必要なベースとなります。対話と協働が得意な学校にしていこう。子どもたちに対話と協働のスキルを身に付けてもらおうということです。ただ、これはこの後の話に全部関わるんですけど、私たちは大人と子どもは相似形だと思っているので、まず子どもたちにこの力を付けさせたいのであれば、私たち大人がまずこの力を付けていく必要があります。もっといえば、執行部をはじめ、大人側の組織単位ごとに対話と協働が成立することを意識してやっていきましょうということを行いました。

2021年度から学校づくりの話始めていって、2023年度の頭までにみんなで話し合った結果として出てきたことが、こちらのスライドにある言葉です。



私たちが目指したいことは何かというと、私たちとは児童、教職員、保護者のことという前提を置きながら、「私たちは経験を通して主体性と自己肯定感を持ち、対話や協働を通して他者と関わりながら学びます」ということです。これは私が作った言葉ではなくて、先生方との度重なる議論の中から出てきた単語やフレーズや価値観をまとめていったらこういう言葉になりましたということです。なので、集団として、学校として決めた目指すあり方となります。言い換えると、ラーニングコミュニティとしての学校ですね。大人も子どもも育てていく学校になりましょうということです。

その中で重点目標をいくつか出したんですが、こちらのスライドで重点目標の2を紹介します。

「心理的安全性の高い組織文化創りと DEI の推進」です。DEI というのはダイバーシティ、エクイティ、インクルージョンですね。立命館学園全体で今、ダイバーシティ・アンド・インクルージョンの推進が非常に積極的に行われているところですが、そこに小学校はエクイティという、Eを入れました。ここでいっていることは、「児童、教職員の一人一人が安心して学び、働くことができる場の形成を目指す」ということ、そして、「教職員間の信頼関係構築に向けたコミュニケーション力を向上させ、多様性の中での対話と協働を通して成長する学校としての組織づくりを目指す」ということです。ここでは心理的柔軟性であったり、成長マインドセットということが重要だということ、お互いを支え合う意識を高めていこうということを強調しています。本当に単純な話なんですけど、対立しそうになったら対立ではなくて協力を意識する。批判しそうになったら批判ではなくて代案を提案する。行動面で具体的に切り替えるだけで、心理的安全性の高まりはある程度実現するだろうと考えて、そう提案しました。



エクイティをなぜ入れたかということなんですけれども、総長宣言の中で『立命館は、構成員がその個性と能力を發揮できる教育・研究・就労環境等の整備に努めます』ということを行っています。学校現場って、私も大学から小中高の現場に入ってすごく思うのは、平等性というものがものすごく強調されますよね。平等に、子どもたちに対して平等な環境を与えなければいけない。平等でない場合には、そのことで批判の対象になったり、ということもよくあることです。しかし、今の新しい学びを考える文脈でいくと、私たちが追求しなければいけないのは、平等性ではなくて公正性とか公平性みたいな話ではないかなというこ

とです。平等性というのは、誰もが同じ条件を与えられているかどうかということ、公正性というのは同じスタートラインに立つことができるためにそれぞれに異なる必要な条件を与えられているかどうかということ。学校の文脈で言えば、学びのベースのスタートラインがそろえられるかどうかということになります。これもまた言うほど簡単なテーマではありませんので、みんなで考えを出し合いながら、多様性をどのように認識するのか、その中でどのように一人一人が安心して個性を發揮できるのか、個の力を發揮できるのかということを考え続けることに意味があります。

新しい学校像や新しいカリキュラムの構築に向けてということでは、いろんなことをしてきました。今日は、本当にかいつまんで、ポイントになる部分だけお伝えしたいと思います。まず前提として、立命館学園全体が今、R2030 チャレンジ・デザインに取り組んでいます。2030年に向けての目標を立てて、バックキャストで計画をして、それを実現していくというものです。立命館小学校もちろんチャレンジ・デザインの目標というのを立ててはいたんですけども、その目標が現場の先生方の意識や当事者感とちょっと乖離している感じがありました。そこを何とか埋めていこうということがまず出発点にありました。これも私がそうしたという話ではなくて、学校の執行部であったり、いろんな先生がたとの意見交換の中でやっぱりそこが大事だろうということが分かってきたと言うことです。

こちらのスライドの写真はすごく象徴的なんですけれども、まず、ホワイトボードミーティングという手法に則って、ブレインストーミングの場を極力持てるようにしました。



その始まりは、2022年度6月の教員研修でし

た。このときは、これからこういうことをしますよと言うことを、私が二点、トップダウンで伝えました。一つは、2025年度における実現を目標に2022年度から24年度、3カ年で学校づくりを進めましょうということ。2025年、20年目になるので、私たちこんな学校ですよということをあらためて社会に打ち出せるような、そういう改革と整理をしていきましょうということ。もう一つは、教職員全体がこんな学校でありたいという思いを出し合い、ビジョン形成に関わるとともに、立命館小学校の強みを生かし、課題を解決する施策を学内外の多様な知見を集めながら具体化していくことで、より魅力的で持続的発展が可能な立命館小学校へと成長していきましょうということを提案しました。そのプロセスを経て、多様な教職員の協働を通して、内発的な学校づくりが行える民主的な組織として成熟することを目指しますということです。これが、2022年6月に新たな出発点として掲げたものです。

その時点ですでに、学園のビジョンやチャレンジ・デザインもあるし、立命館小学校の開校宣言やその他もろもろ、学校の価値観や方針を表しているものはありました。ただし、そういったものが実際に今の子どもたちの姿であったり、先生がたの実感であったり、そういったところとリンクさせるようなディスカッションが不十分だったというのがまずこのときの認識です。ですので、児童を中心に据えた校内議論と学校としての強みを生かした課題解決の施策の具体化、そういったことをしながら新しい学校づくりをしていきましょうということをこのときに打ち出しています。

ホワイトボードミーティングの導入によって、私たちは、新しい議論の進め方を学びました。通常の学校の会議の場では提案者が何らかの提案をして、それに対して質問がありますか。質問があればある。意見があれば意見が出る。だけど、その場で意見を出そうと思う、出せる先生の声しか出ていなかったというのが現状だったと思います。議題によってはそれでも問題ありませんが、学校づくりについては全ての先生がたには当事者感を持ってほしいということと、声なき声というか、今までは出てこなかった声を拾いたいということ

がありました。今までどおりの会議の場を設定しても恐らく同じことになりますから、新たなやり方をしようということで導入したのがこのホワイトボードミーティングです。ちよんせいこ先生という先生が開発された手法で、実際にちよん先生に来ていただいて、ファシリテーターになっていただいて、先生がたをいくつかグループに分けて、ホワイトボードを囲んでいろんなアイデアを出しあうということをしました。これも何度も繰り返して行いました。

さらに、それと同時並行で、他校視察をたくさん行いました。さっきシンガポールの例でも視察ということが書かれていて、やっぱりそうなんだなと思ったんですが、先生がたの視野が閉じないように、外を見ることで新しいアイデアが生まれたりすることはとても大事だと思います。視察先が必ずしも素晴らしいことばかりではないけれども、立命館小学校を少し離れて別の例を見ることで、物事が相対化して考えられたり、新しい観点が得られたり、といった効果がありました。さらには、この他校視察は必ずチームで行うようにしていました。何人が複数の先生がたで行くと、道すがらお話をするわけですね。実際に自分たちが他校を視察して得たもの、感じたことを議論したり、どんなことを立命館小学校に持ち帰ろうかと相談したり、そこまで含めての視察と考えました。

さらには専門家のサポートもたくさん得ています。荒木先生にもお手伝いいただいておりますけれども、いろんな方にとにかく教えてください。私たち、今こういう課題を持っています、ここはどういうふうにできますかということ、たくさんサポートを得ながらこのプロセスを踏んできました。

いったん完成した基本理念図というのがありません。これについては、もう少ししたら、皆さんにお知らせするためのきれいな図が出てくる予定です。その中で出てきたポイントとして、先ほどのホワイトボードに出てきたたくさんの言葉、たくさんのフレーズをまとめて、まとめて、もう一回議論して戻してというプロセスの結果、出てきたものです。まず、「経験を通して主体性と自己肯定

感を持ち、対話や協働を通して他者と関わりながら学ぶ子」という言葉が出てきました。こういう子、こういう育ち、こういう学びを推進していくということ。そこに子（人）と書いてあるんですけども、最初は学習者像ということで子どもを想定して議論してたんですけど、途中から、いや、大人と子どもは相似形だから、これ、私たちも含まれるよねということになりました。ですので「人」です。ちなみにそこには保護者も入ります。

つまり、児童、教職員、保護者がともにお互いの成長を応援できる場にしていきましょうということです。大人も新しい学び方を学んでいかなければいけません。特に探究をしていくということは、大人にとって必ずしも簡単ではない。答えのない問いに向き合い続けなければいけないし、大人自身も学び方、教え方アップデートしていかなければ、何より、人として成長を続けているわけですよ。それは日々子どもと向き合い、いろいろな悩みを抱え、乗り越えながら成長を続けておられる保護者も一緒です。みんなでお互いの成長を応援し合える場にしていきましょうということ、みんなで合意したところです。さらには学び方のキーワードとして、自立した学習者、基礎学力と探求的な学び、挑戦、失敗体験、個別最適、自由進路、探究といったようなキーワードが出てきました。これが今、これからの学校づくり、カリキュラムづくりのベースになっているものです。

ここで、新しい学校づくりのプロセスで大切にしてきたこと、あらためてまとめたいと思います。まず一つ目が、先生たちの声からキーワードやキーコンセプトを拾い上げたということです。さっきも少し言いましたが、他校視察をチームで行ってアイデア相談して考えたプロセス、それから当事者になってもらうということの内発的な学校づくりのできる組織、そのベースを先生がた自身が作っていくということ。先生がたのエージェンシーを高めるプロセスを目指した、ということです。

それから、専門家の助けを得つつも、あくまでも学校が主体者であるということにこだわっています。学校が主体者となって、責任をもって自分

たちの学校をつくっていく。あくまで専門家の先生がたには助言をいただき、助けてはいただくんだけれども、その結果、新しいカリキュラムとか私たちの新しい学校像が「誰々の学校」になってはいけないんですよ。そこに個人名が出ないことが私はすごく大事だなと思って、それは私自身も含めて、学校の関係者も含めてそうですけれども、立命館小学校の組織として責任をもってこの形を作っていくってんだということ、そこを徹底的にこだわるのが重要だと思っています。なので、必要な支援を明確にしなが、その部分について専門家の力をかり、自分たちの責任で構築していくということです。

**新しい学校づくりのプロセスで大切にしてきたこと**

- 先生たちの声からキーワード・キーコンセプトを拾い上げる
  - 他校視察をチームで→持ち帰るアイデアを相対化して考える。
  - 当事者となるために（内発的な学校づくりができる組織に）。
- 専門家の助けを得つつ、あくまでも学校が主体者
  - 必要な支援を明確にし、自分達で構築する。
- 大人と子どもを相似形で考える
  - 「エージェンシー」
  - まずは執行部から「対話と協働」が得意な集団になるように。
  - 新しい学校づくりはまさに「探究」のプロセス。答えの出ないモヤ、モヤ感をみんなで抱え（楽しみ）ながら、協働して前に進む。

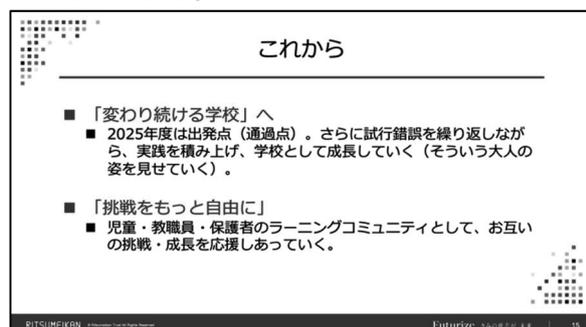
RITSUMEIKAN
Futurize 未来を創る学校づくり
14

それから、大人と子どもを相似形で考えるということ。子どものエージェンシーを高めるためには、私たち大人のエージェンシーが高まらなければいけないし、そこでエージェンシーがうまく作用する形にしなければならない。そして、これは終わりのないプロセスだと考えること、そういう姿勢を持ち続けるということが大事だと思います。まずは執行部から対話と協働が得意な集団になるようにということが一番に心がけたということもそうです。

そして最後に、新しい学校づくりはまさに探究のプロセスなんです。答えのないもやもや感をみんなで抱えながら、これをできれば楽しみながら協働して前に進むこと。言うのは簡単なんですけど、やっているとすごいつらいときがあって、やっぱり早く結論を知りたいし、校長が一言言って決めちゃったらすっきりすることって組織的にたくさんあると思うんです。ただ、そこで答えを急がないことも探究の学びのすごく大事なことです。もやもやしながら、そのもやもやと向き合い続けて、その問いを大事に抱えながらいろんな可能性

を検討していく。その検討のプロセスと大切に  
 するからこそ新しいもの、より良いものが生まれる  
 と信じて、そのプロセスも楽しめるようになって  
 いったらいいなと思っています。

最後のスライドです。「変わり続ける学校へ」と  
 しています。最初に 2025 年に新しいカリキュ  
 ムをやりましょうという目標を立てたんですけど、  
 全体での話し合胃を通してそれが少しずつ変わっ  
 てきていて、2025 年度あくまで出発点とか通過点  
 として捉えようということになりました。私たち  
 はずっと変わり続ける学校になっていこうとい  
 うことです。さらに試行錯誤を繰り返しながら実践  
 を積み上げていく。学校として成長していく。そ  
 ういう大人の姿を子どもたちに見せていきたい  
 ということです。もう一つは、「挑戦をもっと自由に」  
 ということです。児童、教職員、保護者のラーニ  
 ング・コミュニティとしてお互いの挑戦、成長  
 を応援し合っていく、このことも大事にしてい  
 きたいと思います。



では、私の持ち時間以上ですので、いったんお  
 話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうご  
 ざいました。

### IBDP-TOK を踏まえた「エージェンシー」の育成

井上 皆さま、どうもこんにちは。灘中学高等学  
 校国語科の井上志音でございます。本日はエー  
 ジェンシーという言葉キーワードに、中学、高校  
 の一教員として意見を申し上げます。

さて、まず簡単な自己紹介をいたします。私は  
 灘で約 10 年、キャリアとしては 19 年目の教員で  
 す。現在は、立命館大学の教職大学院で「IB 教育  
 の理論と実践」という授業も受け持っておりまし  
 て、こちらは今年で 4 年目になります。

さて、私は現在、IB 教育の実践研究をしており

ます。「灘校の教員がなぜ IB 教育を？」と思われ  
 るかもしれませんが、実は私、灘の前の勤務校が  
 関西学院千里国際中高でして、こちらが大阪イン  
 ターナショナルスクールという IB 認定校を併設  
 し、常日頃から IB 校と教育連携を密に取ってい  
 る学校でした。そこでの 3 年間の勤務経験がきっ  
 かけとなって IB 教育に関心を持ち、今でも IB 認  
 定校と、そうでない学校との教育効果の比較研究  
 をしているという次第であります。

さて、本日は白井先生、堀江先生のお話を聞き  
 ながら、中・高・大・院で教壇に立つ身として、  
 日々の一つ一つの授業を通して自分は生徒のエー  
 ジェンシーの獲得にどの程度、寄与できているか  
 と、自戒の念を持ちながら聞いておりました。エ  
 ージェンシーは画期的な言葉であるというお話が  
 先ほどもありましたが、私なりにエージェンシー  
 を解釈するならば「自分の人生および周りの世界  
 をより良くしようとするような、そうした社会変  
 革の気概を持つこと」でしょうか。社会や世界に  
 対してイノベティブでクリエイティブな志を持  
 てるかどうか肝だと思うのですが、ここで懸念  
 を一つ申し上げるならば、「こうした志を教育の目  
 標や理想として最初に掲げてしまったら、逆に実  
 現できなくなるのではないか」ということです。  
 私も日々、中高での国語の授業のなかで、様々な  
 目標をすえて指導を行っています。ただ、教育の  
 結果として最終的にそうなったらいいなという願  
 いを持ちながら授業はしますけれども、たとえば  
 授業のはじめに「主体性をもって学習しましょ  
 うね」とか「社会の役に立つ人間になるのですよ」  
 などと言葉で目標を掲げ、それになぞらえるよう  
 に教育を施すと、生徒の自由な発想力や多様な成  
 長の可能性を狭めてしまうのではないかと感じて  
 います。主体性を発揮できない単元があってもよ  
 いし、社会の役に立たなくても好きなものを探究  
 できればよいわけです。エージェンシーも教育の  
 目標や理念になりうるものですが、それを教員が  
 語らずして、生徒の自力でどう実現していくか、  
 そうした視点が大切だと思います。

さて、まずエージェンシーという概念に入る前  
 に、IB が教科の学びを通してジェネリックスキ  
 ル（汎用的能力）をどう育てているかという点に

ついて触れたいと思います。IB 生が、教室で獲得する知識や技能を、教室や学校にとどまらないものにいかにか昇華しているかということです。学校や授業で学んだことを実社会にどう転移させるかという視点で考えるとき、学校教育で獲得する知識や考える力は、概して学問的世界と特殊な世界の中だけでとどまりがちであることに気づかされます。たとえば日本の一般の学校では、国語の時間に芥川龍之介の『羅生門』を扱うとき、物語の読解だけで終わることもあるでしょう。一方、IB では、『羅生門』を読んだ学びを生徒個々がどうメタ認知していけるか、自分と社会の関わりの中でどう活用・探究しうるのか。こういうところがゴールになってきます。ですから、IB では言語の授業をするときでも学びをスライドの左上の学問固有の領域にとどまらせず、適宜別の領域にも



転移させられないかというふうに工夫しながら授業づくりを行っているのです。その教育を支えているのが「概念型カリキュラム」です。概念の力で学びと学び、学びと社会を繋ぐという考え方で

先ほどより OECD のキー・コンピテンシーの話題が繰り返しがっていますが、もし私が「IB 教育の最大の特徴は何ですか？」と問われたら、キー・コンピテンシーならぬ「キー・コンセプト」と答えるのではないかと思います。IB には初等教育から中等教育まで、独自の4つのプログラムがございますけれども、いずれの課程でも学校の学び、学校の中で獲得する知識を概念化して、再構築していく営みが入り込みます。ディプロマ・プログラムではコアとして「知の理論 (Theory of Knowledge、以下 TOK)」というものが設定され

ている通り、IB では身の回りの知識を概念化し、実社会にひも付けていくということを重要視されています。

では、なぜ知識を概念化し、社会と繋げるのかということですね。そこには教育における最上位の目標が関わっています。OECD の場合はウェルビーイングでした。これに対して、IB 教育のほうは世界平和の実現ということになります。度重なる世界大戦の反省を踏まえて、IB は二度と民族紛争や世界戦争を起こさないような人間を学校教育の力で生み出さねばならない。これこそが IB の使命です。各民族、異文化を持った人間がぶつかり合いをせず共存するためには国際的視野を持つ必要があります。IB の文脈では国際的視野を持つ人間のことを「インターナショナル・マインドネス」と呼ぶのですが、どういう人間かということ、自分のものの見方や考え方や、他者のものの見方・考え方に折り合いをつけながら、対等に付き合っていける人間です。こうした人間になるためには、自分が信じ込んでいる文化や価値観すらも実は一面的で社会的に構成されたものであることに気づかなければなりません。自分と異なる主張や意見を排斥するのはなく、状況・時代・時流に合わせて自分の固定観念・ものの見方すらもわが身から引きはがし常に捉え直していく。人間というものは、見方や考え方が凝り固まってしまうと当然周囲と衝突してしまいます。そうではなくて、知識、観念、考え方を概念化し、柔軟に多文化・他文化を理解していくことが大事だということです。学校でも家庭でも、獲得した知識を概念化して、実社会に転移させ、問いと経験を通じて、自らの既存の知識を絶えず再構築していくことが IB 教育の根幹だと考えています。

さて、ここからは学習指導要領と IB との相違点のお話をしたいと思います。現行の学習指導要領では新たな学力の三本柱を軸に展開していくことが目指されています。まずは各教科教育です。例えば国語でしたら、国語科固有のものの見方や考え方を使って深い学びを実現していく。教科内を深掘りしていくような教育ですね。次に教科横断的な教育です。国語・社会・英語・その他の教科の知識を織り交ぜながら、横断的に学習してい

くということです。ここから現行の指導要領の一つの特徴を見出すことができます。それは、そもそもバラバラだった教科を総合的な学習の時間や探究の時間で紐づけ、統合していくという考え方です。

一方、IBについて見てみると、そういうデザインにはなっておりません。例えば、DP（ディプロマ・プログラム）という、高校2、3年生対象のIBプログラムの全体像を確認してみましょ。日本との違いが一目瞭然であることがお分かりになるかと思えます。そう、プログラム図が「円形」なのです。中心から順番に「10の学習者像」「指導の方法・学習の方法」「3つのコア」「6つのグループ」、そして最も外側に「国際的な視野」が掲げられています。IBでは、バラバラなものをついに統合するのではなく、学習者像を中心に教科が分化していくという考え方なのです。いわば、初めに目標ありき、を具現化したような教育体系です。人間科学や社会科学や人文科学といった学問領域

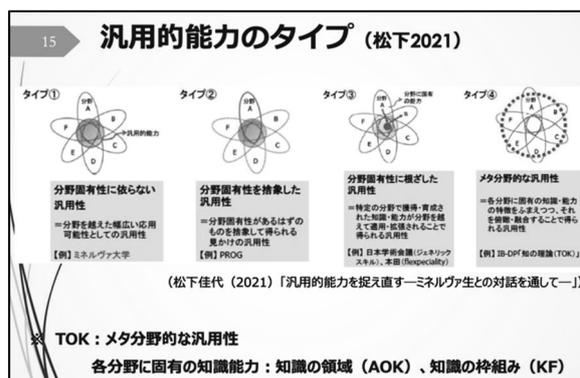
19 IBの教科 (3コアと6グループ)	
コア	
知の理論 (TOK)	: 認知
課題論文 (EE : Extended Essay)	: 学習プロセス
創造性・活動・奉仕 (CAS)	: 情意・行動
グループ名	科目例
1 言語と文学	言語A : 文学、言語A : 言語と文学、文学と演劇
2 言語習得	言語B、初級言語
3 個人と社会	ビジネス、経済、地理、グローバル政治、歴史、心理学、環境システム社会(※)、情報テクノロジーとグローバル社会、哲学、社会・文化人類学、世界の宗教
4 理科	生物、化学、物理、デザインテクノロジー、環境システムと社会、コンピュータ科学、スポーツ・運動・健康科学
5 数学	数学スタディーズ、数学SL、数学HL、数学FHL
6 芸術	音楽、美術、ダンス、フィルム、文学と演劇

(文部科学省 (2021) 「国際バカロレア・ディプロマ・プログラムと学習指導要領との対応関係について」)

ごとに教科を縦割りにする以前に、到達すべき教育目標を据えて、その中で教科を位置づけていく。どのような人間を育成するか、実社会で何ができるようにするのか、ここに重点を置いているのがIB教育の特徴です。

実社会で何ができるようにするのか、と言いましても、単にすぐ役立つような実用性を追求しているわけではありません。昨今、ジェネリックスキル (汎用的能力) という言葉が取り沙汰されます。例えばミネルヴァ大学では、大学の教育カリキュラムのなかに社会で通用する、実用的なキー・コンセプトを設定して、どんどん授業に盛り込んでいます。京都大学の松下先生の分類でいうと、左端のタイプに位置づけられます。これに対して、

IBでは各教科、学問の固有性を担保しつつ、それを総動員して知識や問いを創造していきます。そして、その知識や問いを探究する中で、生徒自身が学問の真理や社会課題、あるいは身につけるべきスキルを見いだしていく。学際的な探究のなかでジェネリックスキルを体得していくのですが、ここでは社会で生きて働くコンセプトやスキル自体も探究の対象になります。



もう一つの大きな違いとして「学習の方法」が挙げられます。日本の学校では、全教科に通底するような「学び方」を教えない学校が多いのではないのでしょうか。たとえば「リサーチスキル」「学問的誠実性」「自己計画力」などは、仮に教えていたとしても、特定の教科にとどまっていたり、教科ごとに位置づけが違っていたりする実態があると思います。こうした不統一性は、見据えるべき資質・能力の解釈においても同じことが言えます。たとえば思考・判断・表現 (私は個人的に定義曖昧語だと思っているのですが)、これらが一体何を指しているのかは現場の教員には見えづらい部分があります。学習の方法にしても、目指すべき資質・能力にしても、こうした学校・教員間の不統一な理解をどのように解消できるのか。私がIB研究している動機がここにあります。こうした問題提起に対するアイデアや着想を与え、国内の教育課題を見える化してくれるものがIBだと考えています。

さて、ここからは「TOK」というDPのコアをご紹介します。先ほど申し上げましたとおり、学校での学びを概念化して社会に生かしていく、転移させていくことがIB教育の根幹にあります。ただ、それはそうなのですが、いざ授業で実践しようとするとなかなか簡単にはいきませ

ん。一つ一つの個別具体的な知識を概念化し、メタ認知していくためには、実は「問い」の力が不可欠なのです。少し脱線しますが、もしかするとOECDのエージェンシー、つまり社会と関わろうとする気概なども問いの精度やその探究プロセスによって評価できるかもしれません。人間は、概して関心のないも事象に対しては問いを作らないからです。生徒の興味・関心に根差した「問い」をいかに学校で創出していくか。これはもしかすると日本の総合学習や一般教養教育の中で肝になるのではないかと考えています。

話をTOKに戻しましょう。先ほどDPのコアは3つあると申し上げましたが、このTOKはその一つに設定されています。残り2つは「課題論文(Extended Essay、以下EE)」と「創造性・活動・奉仕(Creativity, Activity, Service、以下CAS)」です。CASは、いわゆるボランティア活動だけに留まらないのですが、経験を通して学び、振り返りを通じて学びを深化させていくもので、EEは文字の通り2年間のDPでの教科学習を最終的に論文にしたためるというものです。

なぜこの3つがコアなのでしょう。私の理解はこうです。TOKの学習では、ある特定の知識について、問いを使って具体化したり抽象化したりします。要は知識の枠組みを広げたり狭めたりしながら探究していくわけですが、そこで得た学びを机上の空論にしないためには、経験と紐づけ、振り返っていくという視点もまた不可欠です。このように、概念を理念的なものとしてだけで捉えるのではなく、じゃあそれって社会の中でどれくらい有効なのかってことを経験と紐づけながら突き詰めていく。このサポートをするものがCASですね。そしてDP生は、TOKの概念学習とCASの経験学習を2年間フルに学びながら、最終的な成果物としてEEを書いていきます。私は、DPの3つのコアはこういうデザインのもとで設定されているのではないかと考えています。

このTOKは、すでに1980年くらいから日本に入ってきているのですが、当時のIB関連の講演会資料を読むと、原初的なものとしては、「自分が学んだことを正しく理解する能力」「理論的な思考方法を養い、観察能力を養い対処する能力」「自

分が習得した知識を新しい状況に適応する能力」「学生の創造性」などを育むものとして紹介されています。

TOKは7年ごとに指導カリキュラムの改定を行っています。2008年、2015年、2022年ときて、今は2022年のものが学校で行われているのですが、右下の黄色の枠の中をご覧ください。例えばTOKでは「エビデンス・解釈・説明・文化・確実性・権力・客観性・価値観・真実・正当性・ものの見方・責任」これら12個をキー概念として扱っています。非IB校に勤める教員として、なぜこの12個なのかという問いはあっていいと思いますけれども、こういったキーワードがIBのどのような概念型カリキュラムの進展のなかで出てくるのかを知ると背景が見えてくると思います。

IB全体のコンセプトのマップをお知りになりたい方はこちらをご覧ください。一番上がPYPという初等教育にあたる課程でして、このPYPでは「特徴・機能・原因・変化・関連・視点・責任・振り返り」という8つのキー・コンセプトを扱います。中段がMYPという前期中等教育にあたる課程で「美しさ・変化・コミュニケーション・共同体・つながり・創造性・文化・発展・形式・グローバルな相互作用・アイデンティティ・論理・ものの見方・関係性・システム・時間/場所/空間」の16個の概念を学びます。そして先ほど申し上げたTOKでは下の12個の概念を使っていくということです。これらの各課程の概念の数は時代によって変動しています。

これらの各プログラムの概念をよく見ると、連続したものもあるように見えますし、あるいはTOKだけのものもありますが、ここで重要なことは、IBの各プログラムはコンテンツがベースにあるのではなく、コンセプトがベースにあって授業が作られていくということです。といっても1教科ですべてのコンセプトを網羅するわけではありません。例えばMYPの16個でしたら、この16個すべてを国語で扱うわけではありません。国語は国語でこの16個のうちのいくつかをキー概念に据えた授業を展開し、数学は数学で別の概念を扱っていく。要は、数年間のプログラムを修了したら、結果的に全教科でこの16個が網羅されて

いる状況をつくり出す、そういったカリキュラムを敷いているということですね。これが概念型カリキュラムと呼んでいるものです。

この概念を主軸にした探究活動を（もちろん TOK とは呼んでませんけれども）、私はいま灘の国語の授業で採り入れています。検定教科書は使いますが、たとえば『羅生門』を学ぶ際にもコンテンツベースの授業をするだけでなく、『羅生門』を使ってそれをどう概念化して社会に生かしていくかという視点で授業づくりをしています。教科と社会とを概念や問いを介してつないでいくということですね。

私の問題意識は、この IBDP がコアに据えている TOK の考え方や手法を、本当に IB 認定校だけにとどめていいのかというものです。ハッティは学習者が達する質問を分析すること、学習者がどのような質問を持ったのかを傾聴することを構造化した授業をやるのが大事だと指摘しましたが、これは別に海外の学校や IB スクールだけの話ではないですよ。生徒に学び方を教え、育むべき資質・能力を見える化して、概念と問いで実社会と地続きの教育を展開していく。IB 教育にはまねのできない部分、日本の文脈にそぐわない部分もありますが、いいところは見習い、ブラッシュアップしていくことがまさに授業改善につながるんじゃないかなと考えております。

日本の授業では、授業者の発問と学習者からの質問のどちらが多いかというと、一般的に授業者が生徒に対して発問することのほうが多いですよ。そこで封殺されてきた生徒の悶々とした違和感や疑問や質問や問いというものを授業の中でどう効果的にくみ取っていけるか。そこを打ち崩すヒントがもしかすると IB の TOK の中にはあるかもしれないというふうに考えています。

私はこの 10 年間、TOK の考え方を踏まえた概念ベースの授業を学校の現場でやろうといろいろ試行錯誤してきました。その結果、実践を通じてメリット、デメリットの双方が見えてきました。メリットは特に評価についてです。TOK は課題のエッセーについては外部評価を導入していますので、評価の観点が可視化されているという面があります。また、TOK は歴史と教育の蓄積がありま

すので、一つの教科との結びつきの可能性が体系的に整理されている部分があります。TOK で扱うべき問いのリストは今回の発表では紹介できませんでしたが、現行の TOK カリキュラムにはいくつもの知識に関する問い（IA プロンプト）が設定されていて、それを探究するデザインになっています。それから日本でいうところの教科横断的手法のモデルになりうる点はいいい面だと思います。

一方、デメリットと申しますか、そのまま導入できない部分も多々あります。そもそも IB と日本の公教育ではクラス規模が違いますし、教育目標や学習者像を度外視して、手法だけ採り入れようとしてもなかなか有効に機能しないですね。TOK は先ほどの円形プログラムだからこそ生きるわけです。ある種縦割り型の日本の教育ではもしかすると破綻してしまうかもしれません。

最後に IB 校における TOK の教育の効果についてはいくつか先行研究を紹介させていただきます。実際 TOK を受けている IB 生は、問いを通じて自分の学びと社会をつなぐことができる。そして、それをさらにエージェンシー的に言うならば、特定の事象を妄信したり、現状に甘んじたりするのではなく、クリティカルに世界を捉え、よりよくしていく視点を持てるようになると思います。ただ私が注目したいのはこうしたクリティカルな部分の伸長というよりも、TOK で学んだことの価値をより深く実感できるようになるのが、在学中ではなく DP 修了後であるということです。つまり遅効性の問題です。

これはエージェンシーにも関連する話だと思います。生徒の中でエージェンシーが育まれた、獲得できたという状況は、生徒、学生が学校に在籍している間に出るとは限りません。どこまでを教育の責任とするか。自分がいま面倒を見ている中等教育の課程だけにとどめるのか、生徒が学校を卒業した後の生涯の学習も含めて請け負うのかという問題にも関わってきますね。もしかするとエージェンシーも高校在学中に開化するかもしれないし、卒業後、20 年後、30 年後で開花するかもしれません。そういった部分も学校の現場としてはどう考えていくべきなのかということ、評価

の部分に絡むかもしれませんが、考えたいと思っています。

TOKについて、いくつ話題提供をしましたが、TOKもまだまだ進化の途上で、今後も時代の流れにそって形を変えていくと思っています。先ほど触れました通り、現行のカリキュラムでは問いがもう設定されてあって、そのリストの中から生徒が選んで深堀りしていくというものになっていますが、以前は生徒が時間をかけて問いを作っていたんですね。時間がかかりすぎてしまい、探究自体に時間がさけないという事情があったのかもかもしれませんが、そうすると現行のカリキュラムでは生徒自身の問いを作る力っていうのはどう育てばいいのかという課題が生じます。それから遅効性ですね。学習の期間というのは定まっていますが、必ずしもその期間の中で開花するとは限らないという問題を私たちはどう考えたらいいの

32 TOKの効果に関する調査研究②

■ DP卒業生

DPが生徒に及ぼす長期的な影響を調べたグローバルな研究では、多様な背景をもつ20～63歳の卒業生たちの見解が報告されています。DPの卒業生からは、TOKで学んだことの価値をより深く実感できるようになったのは、TOKを修了して何年か経ってからだったという声が聞かれました。ある卒業生は、次のように説明しています。「TOKの経験は、履修中よりも履修後に役に立ちました。（中略）おそらく、TOKの生徒だった時に提示された内容を考えることで得られるものは、当時よりも今のほうが大きいと思います」（Wright 2015）。

■ TOK教員

世界各地のTOKの教師を対象にした、IBワールドスクールにおけるTOKの影響と実施状況についての認識調査では、TOKが生徒にもたらす主なメリットとして、情報を批判的に評価する能力、個人的な思い込みを認識し振り返る能力が指摘されました。また教師は、TOKを通して自身の批判的思考力を高め、さまざまな学問領域の学習内容および相互のつながりへの理解が深まったとし、TOKが貴重な専門能力開発の機会を提供したと強く認識していることがわかりました。（Bergeron and Rogers 2016）。

Wright, K. 2015. International Baccalaureate programmes: Longer-term outcomes. Bethesda, Maryland, USA. International Baccalaureate Organization.

Bergeron, L and Rogers, L. 2016. Teaching the theory of knowledge course in International Baccalaureate World Schools. Bethesda, Maryland, USA. International Baccalaureate Organization.

かということです。

ただ、いま各現場が取り組んでいる総合学習や探究学習を、問いを中心にして展開していく一つのヒントとして TOK は有効ではないかと考えています。私もまだまだ走り出したばかりで、問いを主軸にした概念学習も万全な状況ではありませんが、皆さんからお知恵を頂きながら向上できればと考えております。この後のディスカッションを楽しみにしております。ご清聴ありがとうございます。

## ディスカッション

荒木 堀江先生、井上先生、発表のほうありがとうございます。立命館小学校には私も少し関わらせていただいたんですけども、ここまで今、

進んでいるのかと、非常に面白く聴かせていただきました。「対話と協働」という本当に大事なキーワード、対話と協働という言葉そのものは誰も否定しない言葉だと思うんですけども、でも実際それができているのかどうかということになったときには、自分のテリトリーが説教されるような感じになってしまって、どうしてもなんか嫌だなというふうに思う先生は多分おられると思うんです。ここを言い換えて、例えば批判じゃなく提案にするとか、具体的な行動に切り替わっていくことで先生のエージェンシーというのが発揮される。先生のエージェンシーが発揮される中で子どもたちのエージェンシーが発揮されていく。そういうことを堀江先生の発表から感じ取ることができました。どんなカリキュラムが出来上がっていくのか非常に楽しみにしております。

井上先生のお話、IB と TOK、それからエージェンシーの関わりを発表していただいたんですけども、IB の学習者像があるじゃないですか。あれって、また後で話、聞きたいんですけど、エージェンシーをより具体的に語ったものが、実は10の学習者像に結構現れてるんじゃないかっていう感じがいたしました。そういった10の学習者像がコアになっていきながら、国際的な視野に広がっていくんですが、この中で一つキーワードになるのは、私は「概念化」かなというふうに思いました。今、日本や世界の教育は、コンテンツベースが今、コンピテンシーベースに変わってきて、次にくるのはコンピテンシーベースからコンセプトベースの教育改革に入っていくんじゃないか。先ほど白井先生の発表にもあったように、いわゆる内容を軽視してるんじゃないかというような批判というのは、今後あがってくると思うんです。内容を軽視してるわけじゃないんです。当然コンピテンシーの中にはコンテンツ入ってるんで軽視してるわけじゃないんですけども、ニュアンスとしてコンピテンシーが出てくると使っていく能力みたいところが提示される。となるとその中には学習内容がちゃんと入っているんだよってところで、概念が重視される気がします。今の学習指導要領でもそこは明記されているんですけども、そんなに強調されてるわけじゃないので、

恐らく次の教育改革の中では、「概念化」というところが言われてくるんじゃないかなみたいなところは発表を聴きながら感じました。

白井先生のほうからお二人の発表に対しコメントをよろしく願いいたします。

白井 はい。まず堀江先生、井上先生、どうもありがとうございました。順番で堀江先生のほうからいくつかコメントさせていただきたいと思うんですけども、まず最初に堀江先生のスライドの3ページになりますでしょうか。トップダウンとして、教授でありながら同時に校長先生をされていらっしゃるんですけども、そこでのリーダーシップのあり方です。きょうご視聴、ご参加されている先生がたの中にも、うちの学校にもこんなリーダーシップ、校長先生が欲しいんだけど、それは堀江先生だからだとか、あるいは立命館小学校だからできることだよと思われたかもしれませんが、それは実はエージェンシーが足りないということになってしまうわけですね。もちろん校長先生のエージェンシー、リーダーシップも必要ですけども、全部が全部、堀江先生のような校長じゃないわけなので、いろんな校長先生がいると思います。ちょっとリーダーシップ強めの先生もいれば、非常に多様な先生もいると思うんですけども、それを諦めたりしてしまったり、それはまさにランドセル問題と同じになってしまうので、そこで1人の教員としてどんなことができるのかを考えるのが次のステップなのかなと思います。多分そのやり方っていうのはいろんなやり方があって、自分の学校の校長先生と対話してもいいし、あるいは周辺の若手の先生を巻き込んでいいし、ミドルクラスの先生と話してもいいし、教頭先生でもいいし、多分いろんなやり方があるのかなと思っていて、それを考えていくことで不満とか諦めだけじゃなくて、学校を変えていくという、まさに先生がたが一人一人のリーダーシップを、エージェンシーを発揮できるということなのかなというふうに思ったのが一つ目です。

それから二つ目ですけども、「対話と協働」というキーワード、堀江先生に出していただきまし

た。実はここで「協働」という言葉、堀江先生が書かれている協働は協力の協に働くという協働が使われています。これもコ・エージェンシーのことでもあると思うんですけども、実は私、悩みに悩んでこのコ・エージェンシーという言葉を読んだときに『きょうどう』ってどんな言葉を使ったらいいのかな、日本語の漢字をですね、どういう言葉を使ったらいいか悩みに悩んで、結論としては共に同じという「共同」にしました。それは理由があって、共に同じの共同ってどっちかという少し協力して働くよりも冷たいって言ったらあれなんですけれども、客観的なニュアンスなんです。例えば共同アンテナとか、共同浴場とか別にそこにいる人がものすごい力を合わせて意思を統一して、みたいな感じじゃなくて、たまたまそこに居合わせた人たちが一つの方向に向けてというニュアンスがあって、協力して働くよりも若干キーが下がってくるんです。

THE BLUE HEARTS ってバンドがありますけれども、そこで甲本ヒロトさんという方の言葉で名言みたいなのがあって、学校なんか行かなくなっていていいじゃん。学校なんてしょせん、たまたまその地域に住んでいる同じ子どもたちが集まっているだけじゃん。別に友達なんかいなくなっていていいでしょみたいな言葉があるんですけども、まさに学校ってそうですよね。私立学校にしても公立学校にしても、いろんな条件に合う、たまたま同じ年齢の子どもたちが集まってきている。その子たちに、無理に同じ方向に意思を統一して一緒に頑張ろうみたいな、それもちょっと無理があるのかなと思ったんです。もちろんそういうことができれば、それは望ましいことなんですけれども、全員にそれをやれって無理があるので、まずは共に同じくする。ご縁があって同じ教室にいるんだし、一つの方向に向けて必ずしも意思を統一するまではいかなくても、一緒にやれるものならやっぴいこうよ。やらなくちゃいけないことはやろうよ。それがもしうまくエンジンが回っていったら、まさに協力して働く協働ということになるのかなと思いました。

それともう一つですね。堀江先生から大事な言葉として、イーコリティからエクイティという言葉

葉をいただきました。堀江先生のスライドの8ページ目だと思うんですけども、これは有名なツールですよ。大人とお兄ちゃんと弟くんでしょうか。違う支援を行うと、みんなが試合を見れるという図ですけども、これって日本ではもちろん、エクイティってことも大事だと思うんですけども、いざやるのってすごく難しいんじゃないかと思うんですね。例えば、発達の課題がある子に対して、じゃああなたの宿題は、本当はみんな今日までにしなくちゃいけないんだけど、あなたは1週間後でもいいですよとかですね。マルチ・タスクが苦手な子どもに、あなたはまず国語の宿題を持ってきて、じゃあ次は算数の宿題みたいなことってというのは、できることはできると思うんですけども、やっぱり他の子たちから見たらそういう扱いってのはちょっと不公平じゃないかっていう意見も出てくるのかなと思っていて、ここはぜひ先生に伺いたいなと思ってですね。このエクイティっていう概念を実際の学校現場に入れていくってことは、いろんな周りの子どもたちの理解とか保護者の理解とか、その辺りもなかなか難しいところがあるのかなと思って、ぜひ伺いたいなという点であります。

堀江 ありがとうございます。いくつか本当にポイントとなる所を今、言っていたんです。まず最初にリーダーシップのあり方ということで、私、自分で分析するに、私自身がもともと学校の常識を知らない立場で校長を始めていたというのが、良くも悪くもうまく機能したのかなというふうに思います。恐らく学校、小学校であったり、例えば立命館小学校でずっと仕事をしてきた方が校長になったとき、もちろんその学校文化とかそれまでの組織文化を身体化した状態で校長になると思うんですけど、私は常識とかそのあたり前を知らずに来たので、逆に客観的に組織の状況が見れたかなと思うのと、もう一つは私自身の強みと弱みというのをすごくよく認識しているので、私自身はそれまでにやってきた仕事の経験からも参加型のリーダーシップというものが得意なので、それが生かせるといいなと思ってやりました。

実際やっていくと本当に校長先生、決めちゃってくださいよみたいなフラストレーションを先生がたが感じている、そういう声もたびたびありました。もちろん私がそこで決めちゃえば済むこともあるし、ここは私が決めちゃったら全部今までの頑張ってきたプロセスが水の泡だというふうに思ってしまうんじゃないかなということもあるし、何よりも私自身が決める答えよりも、先生がたが本当にとことん議論をして納得した答えが初めて組織の結論になると思ったので、そういう意味では非常にお互いにもやもやしたプロセスでもあったかなというふうに思っています。

2番目に『きょうどう』という言葉、今、あらためて共に同じという言葉の意味、伺って面白いなと思って聞いていて、私は協力して働くというのを意識的にここで使いました。というのは、対話と並べたときにどちらもプロセスの話だと思うんですね。逆に協力して働くのほうは、必ずしも同じ方向を向いてない可能性も含めて私は考えています。全然立場が違ったり、価値観が違ったり、考え方が違う人が対話をしていく。そのプロセスが大事なのと、その中でお互い立場も違うし、価値観も違うんだけど何か生み出せる、一緒に生み出せるんじゃないか。そこを協働の結果として期待したいなというふうに思っています。これはもしかしたら私がかつと異文化教育の研究をしていたので、文化が違う人同士のインタラクションをどう起こすかみたいなのところに、ある意味、そのマニアでもあるので、そういったことを持ち込みたいというのを思って考えていることなのかもしれないなというふうに思います。

あと、エクイティのことは本当に実は難しいというか、そのまま実現させることは本当難しく、ただ一つ目のステップとしては、まず概念として学校全体で先生がたがイクオリティからエクイティへの変換の重要性ということ、まず概念的に理解していただくということが大事なかなというふうに思います。どんなこともそうなんですけど、学校の教え方を変えとか子どもとの関係を変えとか、これって組織文化、変えていくことってその意義が頭で分かったとしても、長年やってきた心と体の部分ってそんなに急速に変わらないで

すよね。頭で分かったことがそのまますぐ行動にできるわけではないし、それをうまく機能させるためのスキルがあるわけでもないの、ここは必ず時差が出てくるだろうというふうに思います。なので、組織全体でエクイティを高めていくっていうことは、これもまた辛抱強く少しずつやっていかなきゃいけないことで、これもたくさん議論してまずけれども、一つきっかけになるのは合理的配慮ということが学校としてもしっかりやっていかなければいけないということがありますので、そこはある意味、外からの外圧というか、受けながらそこは進めていこうということで制度化を進めているところです。ありがとうございます。

荒木 今の話もそうですけど、エクイティってすごく難しく、特に最近、子どもの貧困とかが問題になっている学校の中では、いわゆるご飯を食べられない子どもたちに対してどうサポートするかという問題が絡んできます。貧困層の子たちだけにお金を出してしまうと平等ではないというところで、先生とか結構、困りながらサポートしてるんですけど。例えば大阪の高校とかであれば、誰でも食べてもいいお菓子ルームみたいなのを設置して、ただ、それが本当はご飯を食べられない子を対象としたサポートルームなんですけれども、でも誰でも来ていいという状況にしておくと、平等という概念は守られながらのエクイティも発揮できるというような、そういう取り組みをしている学校もあつたりします。ただそこに至るまではすごい実は紆余曲折がたくさんあったと思いますが、そういう取り組みをやってる学校もあるんです。

堀江 今の点で思いついたんで、多分ユニバーサルデザインということも一つ絡んでくるかなと思います。例えば先生がたからの説明であつたりとか提示の仕方について、一部の子だけに別の形を提示するよりはみんなが分かりやすい形っていうことが学習の効果を高めていくんじゃないかって、そういったことを今、プロジェクトで取り組んでいただいているチームもこの中にあります。

白井 すみません。堀江先生のほうで1点だけ言い忘れてしまったんですが、多様性の話なんですけれども。学校って結構、同質的な場所だっていうふうによく言われていて、確かに同じ年齢の子たちがいるって意味では同質的だと思うんですけども、価値観とか経済的な家庭の状況とか結構、全然違う子どもたちがいろいろ集まっている場でもあるわけなので、そういう意味で学校って必ずしも同質的だけではないので、そういったようにいろんな価値観がぶつかりあうことでより良くなるのかなと思いました。

あと、子どもたちに聞くと、きょうも多分いろんな学校に勤務されている先生がた、いらっしゃると思うんですけど、いろんな学校の先生がた活発に交流されてるんですけども、子どもたちの交流ってあんまりないんです。結構、子どもたち同士で違う高校の子たちが集まったりすると、「君の高校、こんなこといまだにやってるの？」みたいな話が割合出てくるので、やはり子どもたちもいろんな子どもたちをさらにつないでいく。別に同学年だけじゃなくて、いろんな学年であつたり、もちろん外国とつないでもいいし、そういう機会が増えるといいと思いました。すみません。ありがとうございます。

そして、井上先生、ありがとうございました。インターナショナル・バカロレアについては私もいろんな所で勉強をさせていただいたんですが、あらためて勉強になりました。いくつかありますけれども、まず一つに、コンセプトチュアル・リレーションということで先生、おっしゃられていましたけれども、このキー・コンセプト、確かにIBのカリキュラムでもキー・コンセプト、すごく重視されているんですけども、恐らくこれって今、近いのは学習指導要領における見方・考え方をさらに発展していったものがキー・コンセプトになっていくのかなという気が、個人的にしています。恐らく今の見方・考え方は、今回の指導要領ではまだ未熟な部分があつたのかなと思ってるんですけども、ただ、さっきちょっとご紹介しましたけれども、各国では重要概念、ビッグアイデアといわれるような、どっちかという教科なんかですごく重要なポイントみたいなものを選び出す

方向に強まってきています。これは国によってはビッグアイデアと呼んでいますけれども、実は他の国ではキー・コンセプトというふうと呼んでいるところもあったりしていて、IBのキー・コンセプトと若干違うところもあるんですけども、そのキー・コンセプトみたいに、どこまで抽象的なレベルにするかということはいろいろ考え方があろうと思うんですけども、恐らくこのキー・コンセプトをものすごい抽象的になって言ったものが今の見方・考え方であって、もうちょっと具体化していくと、例えば細胞は生命体の基本であるとか、そういうより具体的なものがキー・コンセプトだと思うんですね。それをどこのレベルで考えていくのかっていうのが、恐らくこれから次の段階のカリキュラム改革、日本の指導もそうですし、日本だけじゃなくて各国において、それを考えていくっていうのが一つの大きな作業、方向性になっていくのかなっていう気がしています。

それから TOK と総合的な学習・探究の時間についてですけども、確かにこれってもともとすごく似ていると言われていて、TOKのほうがある意味、先行的にメソッドを作ってきたところだと思います。総合的な学習の時間、探究の時間については、本当は日本ってすごい早かったんですね。99年改訂、98年、99年改訂で入れてるので、ものすごいトップランナーだったんですけども、残念ながらその当時のいわゆる「ゆとり教育」カリキュラムというふうに言われてしまって、全体がパツとしないことになってしまった。ただ、今、それがもう一回、リバイバルをしているということで、この TOK みたいなメソッドを、それをそのまま入れるかどうかっていうのはいろんな考え方、アプローチもあると思うんですけども、方向性としては間違っていないのかなと思います。井上先生がおっしゃったように、どっちかというところ今の日本のカリキュラムの設計というのは、各教科の学びがあって、それを束ねるような形の総合学習の時間というふうに設計されているように思います。

きょう、井上先生からもご紹介いただきましたけど、これはスライド 13 ページのところ、総合的な探究の時間のところで、自分で課題を立て

て情報を集め、整理、分析し、まとめ、表現する。これは総合的な探究の仕方。こういう絵を描いている図がありますけれども、この自分で課題を立て、情報を整理していくというのがあるんですけど、多分これ、自分で課題を立てるって一番難しいところですよ。これを私は安易に言い過ぎているのかなという気が、正直、個人的にはしていません。最近、私、仕事の関係で博士人材をどういうふうに活用していくのかということをやっているんですけども、まさに博士人材の役割こそ自分で課題を立てて、その解決策を生み出すということなんです。博士人材に求めていることを小・中・高校の子どもたちに求めるんですかっていうことなんです。

実際に自分で課題を立てられているのか。確かにそこら辺のことを見て、地元の商店街のシャッターが閉まっているので、どうやって経済活性化していくか考えていますみたいなことはある意味誰でもできる。ただ、それが学術的、学問的にどんな意味があるのかということについては、十分、学校現場で取り上げられてないし、何となく思いついた課題、何となく最近近所で見ただけの植物が、外来性の植物が増えてますとか、その問題を各教科とつなげるっていうことをうまくできないんじゃないかと思うんです。ぜひこの辺り、今の問いを立てるといふところの難しさ、もし要件やヒントがあって、総合的な学習の時間にも生かせるようなものがあつたら、井上先生にぜひお話をさせていただきたいなと思っています。

井上 IBの掲げるキー概念については、時代によって変動があるという話を先ほどもいたしましたけど、私が気にしているのは網羅性の部分です。学校現場で扱うべき概念は複数あるとは思いますが、果たしてバランスよく網羅できるものなのかという問題意識です。学校で取り扱うべき概念の中には社会に直接役立てることができる概念もあれば、一見役立たないんだけど学びを深掘りできる概念もあると思うんですね。それらを一個人・一教科のなかで作り上げるのは不可能ですので、もちろん複数人で膝を突き合わせて考える必要があります。ただ、複数人で考えると

経済社会で役に立つ、就職や進学で役に立つという方向に行ってしまうとまたいびつな形になってしまうと思いますし、網羅性をどういう形で形成していけばよいのか。私の目から見ても IB の現状のコンセプトというのは、果たしてこれで全部、全て網羅できてるのかという疑問はいつも見るたびに思うんですね。なので、教科固有の見方、考え方という部分も踏まえながら、もう少し日本流に整理できたらよいなと考えています。私も日々、自分で概念を作りながら、果たしてそれが自分の趣味嗜好、好みが出てきたものになっていないか、偏ってはいないかということのを常日頃チェックしながら授業しています。

それから問いについてですけれども、先ほど白井さんのはしごの話がありましたが、同じようなことが私の心に引っかかっています。堀江さんのボトムアップの話題にもつながるのですが、要は意見を言わされているのか、言っているのか。問いを作らされているのか、作っているのか。実はここには非常にいろんな階層があるように思います。きょう白井先生のご発表で、必ずしも上位が良いとは限らないってお話ありましたが、果たして今、目の前の生徒が作っている、あるいは授業中に出してくる問いとか課題というのは、どの次元のものなのだろうということを悶々としながら考えておりました。

TOK も IA プロンプトといいまして、所定の 35 個の問いが設定されています。もしかするとこの 35 個の問いは一般の学校の総合学習でもそのまま使えるのかもしれませんが、ただ、これらの問いの網羅性はどうか、他人の作った問いではやらされ探究にならないか、この辺りは課題として残ったままです。その意味で TOK もまだまだ発展途上だと考えております。

白井 ありがとうございます。もう一点なんですけれども、先生から最後、すごく大切なご指摘があったと思うんですけれども、エージェンシーの遅効性というお話がありました。確かにエージェンシーって授業を 1 回受けたから即座に高まりましたとかそういう世界ではないので、多分タイムラグというか、どこかで出てくるところがあると

いうのは、それはおっしゃるとおりかなと思います。同じような話で実はウェルビーイングも、これもどこのタイミングかがすごく大事な話でして、現在のウェルビーイングを高めることが目的なのか、それとも、将来のウェルビーイングを高めることが目的なのか。われわれ社会人として仕事をしているとなかなか辛いときとか、ものすごく忙しくてみたいなきももあると思うんですけども、逆にそこを頑張ると、その後いい世界が開けるとか、そういうこともあると思うんです。子どもたちにしても、例えば甲子園に出るような子どもたちがすごく辛い練習をしていたと。でも、その結果として甲子園に出場したみたいなことは当然あるわけで、一瞬のスナップショットでウェルビーイングを測るとそれは決して良くないかもしれないけども、その後につながるものもあるかもしれないというところで考えていくと、やっぱり教育全体が即時的にスナップショットで測れるものはないと思うんです。このエージェンシーに関してはいろいろな話を聞いていると、その場で短期的に、授業をしたからじゃあどれぐらいのウェルビーイングか測定しましょう、みたいなの、やっぱりそういう世界ではなくて、もうちょっとロングタームで考えていくべきものなのかなというのをあらためて感じたところです。ありがとうございました。

井上 ありがとうございます。何をもちょう身につけたとするかの判断は本当に難しい面があります。例えば小学校 6 年間、中学校 3 年間、高校 3 年間で、児童・生徒がどの程度、エージェンシーなどが理解できたのか。その判断は本当に難しいと思います。世の中のいわゆる「大発明・大発見」もそうですけれども、当時は社会に役立てようと思って開発していなかったものが、後々実は役に立つことって往々にあると思うんですね。それを、「世界を、社会をより良くするんだよ、君たちは」とはじめに言ってしまった段階で、この生徒が本当に探究したいことが制約されてしまうんじゃないかなと思ってしまいます。だからはじめにエージェンシーという概念を解説したり、理解させたりすること自体についても、実は私、若干抵抗感

があるんです。エージェンシーってこういうものだよとか、ウェルビーイングってこういうものだよと説明すること自体が、生徒の自由な発想、自由にものを考えるということを制約しやしないかということですね。その辺りも踏まえて、実際どうやって落とし込むことがベストなのかと私も考えさせられます。

荒木 ありがとうございます。今の視点をもうちょっと掘り下げて面白いのかなと思いますが。確かに長い視点で教育って考えていく必要が当然あるんですけども、でも、その長い視点で考えたときに、あなたの未来のために思って言っているんだよという、すごくありがた迷惑な言葉を先生って発信しちゃうとか言ってしまうがちなんですよ。それって必ずしも子どもが要求していることではないかもしれないし、でも、それは本当に子どものために思って言っている言葉かもしれないし、でも目の前に子どもが苦しんでいる状況を何とかしたいと思っている言葉かもしれない。分からないんですよ、結局。どこに視点を置いているか。でも、子どもの意見、子どもが何を考えているのかということ、それこそ言わされているのか、言っているのかの問題になってくるんですけど、でも子どもが意見を言うという意見表明する権利というのは、今までそこまで日本って大事にしてなかったんじゃないかなというのはあるので、やっとかども基本法ができて、子どもの権利というものが日本の国内法としてやっとか認められたという、この機を大事にして、エージェンシーという言葉、いわゆる自己表現というか、自分はこうしたいなという意見表明をしていく、そのチャンスというのをちゃんと保障していくということが、学校教育の中で大事なポイントになってくるんじゃないかなという感じはします。

では堀江先生、井上先生から、先ほどの基調講演を聴いて、白井先生のほうにご質問とか、こういうことをもうちょっと掘り下げて聞いてみたいなというポイントがありましたらお願いします。

堀江 ありがとうございます。私が伺ってみたいことは、私の発表の中でもとにかくトップダウン

からボトムアップ、ミドルアップに変えていくことがこの組織の、組織づくりに大事だと思って、徹底してやったというお話をさっきさせていただいたんですけども、OECDのラーニング・コンパス、アイデアが、あれは政策として出たというか、そういう考え方が提示されて、それを各国が受けて実行していくなら実行していくという性質のものかなと思うんですが、実行していくときに国での導入の仕方が、例えば独断的に政策で、もう各学校これでいきましょうみたいな形になると、やっぱりそこはちょっと矛盾するのかなと思うところがあるんですね。ただこれは各国の教育政策であったりとか、公教育あり方によっても随分違いがあるんだろうなと思うんですが、何かその辺りの導入のプロセスの事例というか、違いというか、何かそこでお感じになることがあったら教えてほしいと思いました。

白井 堀江先生、ありがとうございます。確かにおっしゃるとおり、あくまでOECDからの提案、提言ということなので、これをそのまま各国に政策に落とし込むってことはないんですね。各国、実はかなりそこは慎重というか、単純にこれをやりましょうというところがあまりない。あまりというか、全くないと言ったほうがいいのかもありません。各国とも内政干渉になることをすごく懸念していて、OECD側も一番心配しているのが内政干渉という言葉です。なので、OECD側からいつも言っているのはリフレクション・ツールですと。各国が自分の政策に適宜、役立っていますと。実はもうそこでかなり明確な線を引いているというのが実情です。

とはいえ、それに影響を受けて、自主的に取り入れていくところもあったりして、韓国なんか結構、今のところ入れてありますし、今の日本の教育振興基本計画の中でも、OECD的な目で見ると、これOECDの言葉、概念だなということもちらほら出てきますので、そういう意味では入っているところはあるとは思いますが、やっぱり各国は結構自分たちの概念というか、それぞれいろんなしがらみというか伝統とかいろんなものを引き継ぎながら持っていますので、そこに何かぼ

っとこれが取って代わるみたいな感じでは全くなく、本当にそこにエッセンスが入っているかなという感じかなと。

堀江 さらにいいですか、今の。今、韓国は比較的積極的にというふうにおっしゃったんですけれども、韓国の、私もこれは一面的な知識かもしれないんですが、非常に受験競争が激しくて、要するに知識偏重的な教育が一般的かなと思って、ラーニング・コンパスで提案していることと遠いようなイメージあるんですけど、そこはそこに対する問題意識があつてということですか。

白井 おっしゃるとおりですね、やっぱり韓国もなかなか国内で変えるというのが、従来のカリキュラム、例えば入試って社会状況に今のところひも付いてますので、それを変えるってことはなかなか難しい部分があると思うんです。そこに一つの、改革の中にリンクとしてこの Education2030 を使うということを考えている人はいると思います。

荒木 井上先生、いかがでしょうか。

井上 私は個人的に、きょう白井先生がご提示なさったラーニング・コンパスの設計図と、私が提示した DP の円形のプログラム図がどことなく似ていて面白いなと思って見ておりました。違うのは目標だと思うんです。IB の場合は国際的な視野や世界平和がくるわけですね。これは OECD の場合はウェルビーイングにあたる部分かと思えます。ご講演のなかでも、抽象的であるがゆえに改定されたというお話がありましたが、現場からすると、ウェルビーイングでもまだまだ抽象的な印象を受けます。各文脈に合わせて具体化する作業もすごく大事だという話がありましたが、こうしたものは具体化すればするほど細分化して、バラバラになるわけですね。授業も同じです。大きな目標で集団授業を展開しようとしても、生徒個々の具体的な課題は違いますから、個別最適と集団授業との間でジレンマが生じてしまう。ウェルビーイングをどの程度具体化して授業に落とし込んで

でいいのかという部分が、現場の人間からするとなかなか難しいのですが、この辺りいかがでしょうか。

白井 ありがとうございます。OECD のウェルビーイングもある程度の先進国の集団、今でいうと 38 か国だと思うんですけども。集団なのである程度の共通項ができるというだけなんです。とはいえ、当然三十数カ国の中でもいろんな意見が分かれているとか、ここは大事だとかここはそうでもないとか、これもあるので、最後の採用というのは結局各国に委ねられているんですね。OECD として、どれが大事だとかどの、例えば環境問題でも水質が何パーセントじゃなくちゃいけないとか、そんなことは言うて言いにくいので、あくまでも現状だけを示していると思います。

各国、各学校のレベルにどう落とし込むかというときに、今、学校教育目標を各学校が立てていきますけども、やっぱり抽象的ですよ、どこも。

「主体的な～」とかそういう感じだと思うんですけども、そこをどこまで具体化していくのかということだと思うんです。そのときに、例えばすごく分かりやすい例でいうと、TOEFL で何点みんな取るとか、そういう目標を立ててる学校もあつたりしますけれども、私はそれならそれでいいと思います。みんなが合意してればいいと思うんですけども、恐らくこれまでの目標の立て方では、目標を立てることが非常に大変だと思うんですよ。いろいろな価値観が、例えば私立であれ公立であれ、いろんな価値観の子どもたち、また保護者の方がいる中で、共通する目標はこれだというのが難しいからこそ、一歩下がって抽象的な目標を見つけたというところがあつたと思うんです。そこで一番の課題というのは、そうは言っても、合意できる部分というものもある、相当あると思っているんですね。それなのに、結局、合意できない部分があるから議論を避けちゃう。結果的にすごく抽象的なものになり、誰も結果的に見えないような目標になっちゃうんですけども、実はそこにたくさんの合意できる目標というのがあつて、しかもそれは子どもたちの生活とか、授業の中に関わっているものじゃないかと思うんですね。例

えば授業のやり方、うちの学校、どっちかといえ  
ば伝統的な先生中心の授業なので、もうちょっと  
子ども側のアクティブラーニング型の授業にして  
もらいたい。じゃあ、それを目標にしようとかで  
すね。そういうことっていうのはいくらでも学校  
単位でできると思うんですけども、抽象的な議  
論に変わってしまうんですね。なかなか子どもた  
ちを巻き込んで議論できるところに踏み込んでい  
けないというところが、私は最大の課題であって、  
かつ改善できることなのかなというふうに個人的  
には思っています。

井上 ということは、エージェンシーやウェルビー  
イングの目標というものを、生徒と対話を通じ  
て作っていくことが大事ということですかね。分  
かりました。

あと、エージェンシーを目指す主体が生徒なの  
か、教員なのか、学校なのか、その辺りがすごく  
気になってまして、三観点評価のときも同じよう  
な疑問が頭をよぎるのですが、このあたりはどう  
考えればよいのでしょうか。仮に生徒のウェルビー  
イング、エージェンシーといったものが具体的に  
定まったとして、それを学校で育むとなった場  
合に、教員サイドのエージェンシーはどうなのか。  
多分、堀江さんの発表にも関連してくると思うの  
ですが、われわれはそういう教育を受けてこなか  
った世代ですが、ではそうした理念を教員サイド  
は持ち合わせているのですかと問われたときに、  
ちょっと心もとない部分がある。それを踏まえた  
うえでどうやって教育活動をどう展開していくの  
かという部分がすごく疑問としてあります。取り  
あえず堀江さんのほうにも確認ですけれども、教  
員側がエージェンシーを持って職にあたるための  
取り組みの例などございましたら教えていただけ  
ますか。

堀江 ちょっと気を抜いてはしましたが、難しい質  
問ですよ。私、今、ずっと考えてたのが、エー  
ジェンシーの遅効性ということ、ご指摘あって本  
当そうだなと思ったのと、ただ一方で、ウェルビー  
イングが目標であるということなんだけれども、  
これは目標達成したかどうかを検証しなきゃいけ

ないかどうかは私、ちょっと疑問だなと思ってい  
て。今、私たちがやっていることのつもりとして  
の目標はあるけれども、それを目標達成したかど  
うかの検証するサイクルに乗せなくてもいいとい  
うか、乗せないことが今の流れなのかなって思い  
ました。

じゃあ、エージェンシーを高めるためにどうし  
たらいいかって。私も昭和の教育を日本で受けて  
きたのでなかなか難しいなと思う一方で、アメリ  
カで私が受けた教育の中ではちょっと参考になる  
なと思う経験があったりは多少するんですけど  
も。ただ、これも日常的なやり取りの中で気付い  
て拾っていくしかないんじゃないかなと思ってい  
ます。一つはきょうのお話、伺いながら思ったの  
が、さっき言われているのか、言っているのか、  
本人が言っているのかが重要だということは本当  
もそうだなとっていて、本人が言ってきた瞬間  
をちゃんと捉えて、意味付けして返すみたいなや  
り取りをちゃんとすることが大事なのかなという  
ふうに思っています。

私の立場での経験でしかないんですけど、思っ  
た以上に反響があったのが、何年か前、2年くら  
い前ですかね。5年生の女の子がわざわざ私の所  
に来て、私たちスカート、制服スカートしかない  
けれどもズボンは履けませんかと。なぜかとい  
うと、男子と一緒に遊んでいるんだけど、側転  
したりとか、そういうことがスカートだとできな  
いんですよ。要するに、服のせいで制限を受けて  
いることを理不尽に思うから何とかありませんか  
ということを言いに来ました。もちろんそれは校  
長先生に言ってみたらというふうにはけしかけて  
くれた先生もいるんですけど、その形で本人たちが  
言いに来て、私がそれを受けて、なるほど、そう  
だねということで。じゃあ、いったん検討します  
ということで引き取りました。そのことを学校内  
で先生がたと相談をして、すぐに何か新しい制服  
を開発することはできないけれども、今あるズボ  
ンを履けるようにだけ、規則を変えてそうしまし  
ようということを決めました。そうすると、本人  
たちとしてみたら、わざわざ言いに行ってみたこ  
とが実現したということで、すごく私の想像以上  
に本人たちの自信になったということがありまし

た。あと、それは保護者の方からもすごく言われていて、もしかしたらこういうことの一つ一つがエージェンシーにつながるのかなと思いました。

ただ、子どもの言ってきたことを全部実現するわけにはいかないの、それは本当に 10 のあるうちの 1 が実現したらいいほうだと思うんですけど、ただそのときの実現してないアイデアであっても、こちらの受け止め方であったりとか返し方というのは影響するかなというふうに思っています。なので、日々のやり取り、コミュニケーションの中で、どれだけ私たちが、一挙手一投足がエージェンシーのある形で示せるかというところが非常に重要だなと思いました。

荒木 日本の意見表明権が広がらない理由って、子どもたちが意見を言ってきたらそれをかなえてあげないといけないって大人はすぐ思ってしまうところにあるんじゃないかなと思っています。それって対話じゃないんですよ。言ってきたことに対して大人としての見解を示していったって、合意できることはできるし、それは無理だよというところ、そこのプロセスがすごく大事なのに、そこが面倒くさくて、もう言ってくないでという感じで事前にシャットダウンしてしまうから、日本では意見表明が進んでこなかったんだらうなと思っています。その背後には子どもを保護する対象っていうところも強くて、権利者というよりも守らないといけないから、守るべき大人として姿勢を示す。だからこそ、もう言わなくていいよというような感じ。その裏返しがそういう結果になったのかなという感じはします。

堀江 それに関わっていくと、子どもだけじゃない、保護者の方もそうなんですよね。保護者の方も何か学校に言うてくることに対してすごいハードルがあるし、学校も言われたらすごく重く受け止める傾向あると思うんです。それも私、解消したいなと思って、毎月各学年の代表の保護者の方と懇談会を今しています。そこではいろんなことを言っていたいて、本当に先生、こんなこと言っていたいんですかねみたいなことも含めて、取りあえず言ってみてください。ただ私は全て聞

かれたことを実現するわけじゃないし、でも意味は聞きたいし、保護者の方にしか気付かない観点があるから、私はそれを聞きたいので、実現できることは実現するし、実現できないことはできないように説明しますから、どうぞ言ってくださいという形でやっている。これも今 3 年目なんですけど、かなりいろんなことを言ってくれるようになりまして。お互い、保護者の方も言ったから実現したから良かったとか、実現しないからどうってこともなく、とにかく対話に参加していただくということに、ちょっとそういうことに慣れていただけてるかなというふうには思います。

荒木 ありがとうございます。井上先生のほうからどうぞ。

井上 少し脱線しますが、実現する・しないと対話のお話について私、普段から考えていることがあるんです。社会には、意見を受け取る側の心持ちとして、やたらと首尾一貫性とか初志貫徹を要求する傾向がありませんか。主張する意見が変わると、信念のないやつだとか、そういうふうを受け取ってしまう風潮があるのですが、そもそも言いたいことや主張というのは、社会や時代・状況に応じて変わるのは当然だというスタンスを持つことが大切だと思います。だから、先ほどのウェルビーイングの目標も時々刻々、日々変わっていいと思うのですが、どこかで宣言どおりにしなさいという圧力が加かってしまうのだろうかと感じました。

白井 私も今の井上先生のご意見、全く同感なんですけれども、エージェンシーを鍛えていくというのは、まさに、さっきこれは先生がおっしゃいましたけれども、チャレンジして、駄目なら駄目で、それでまた違う方策を諦めずに提案してくれるということだと思うんですよね。例えば、自分は、最初これで提案したんだけど先生から断られましたと。だったら、じゃあこの方法、どうですか、この方法、どうですか、どんどん提案できていってるので、それでこそエージェンシーが磨かれていくということです。その過程でいろんなこ

と考えなくちゃいけないんですね。自分の最初の提案というのは先生に却下された。却下された、何でだと。違う説明だったらいいのかなとか違う発想だったらいいのか。そのために勉強しよう。どんどん学習が広がっていくんですけども、それがなかなか難しくなっているというのが一つあると思います。

それから、井上先生もおっしゃられた初志貫徹というか、論理性みたいなところ結構問われること確かにあると思うんですけども、これこそ私、PDCA サイクルの成れの果てじゃないかと思うことがあります。この Education 2030 では PDCA を否定してるんですよ。否定して AAR（見直し、行動、振り返り）とっているんです。PDCA というのは結局、工場生産のやり方なんですよ。こういう計画をして、やってみて駄目だったら直して次、いくっていうやり方なんですけど、AAR というのはもっと柔軟であって、もうやってみてどんどん変えていくということなんです。一回こうやってみるみたいなことを別に求めてなくて、やってる途中だっただけで変えていいじゃん。これ、工場生産じゃなくて、われわれ教育の話をしているんだ。だから AAR というんです。これまで結構 PDCA というのが正しい、正義みたいなことがあまりにも浸透してしまったので、そういう途中から変えるのが許さないとか、そういうつまらない正義感に陥ってしまってるような気がします。

荒木 本当にそうですね。激しく同意します。さて、時間がきましたのでフロアのほうから質問のほうを募集したいと思います。挙手のほうをお願いします。

参加者 1 どちらかという和多分、白井先生かなと思いますけれども。ちょっと理解を見すえた話になりますけれども、どちらかという先生がた 3 人のお話、市民教育の部分で話されていると思うんですが、一方で理系なんかは専門家のための準備教育という側面も非常にあって、実態として、例えば理科教育は多分その方向の力が欲しい人たちだと思うんですが、その部分はあんまり実は語られていないというか、それは 3 人が語っていな

いというんじゃないかと、世間がそもそも語ってなくて、でも実務的には実際にはその方向がすごく強いという部分があると思うんですよ。その部分は市民教育だ、初等中等教育が市民教育だというように、がつつり方向転換するのか、それは難しいかもしれませんが。理系の専門家の準備教育という部分を今後重視していくのかという、そこら辺、ちょっとすみません。曖昧な質問で申し訳ないんですけども、ご意見というか、ご助言いただけたらと思います。

白井 ありがとうございます。大変、大事な指摘だなと思って伺っておりました。私の個人的な感触では、これまで特に文系、理系とか決めつけるのあれですけども、どっちかという人文社会系統の学問というのが、実際の社会を若干管理している。一方で数学とか理科ですと、割とその後、修士課程、博士課程に行って、企業の研究所とかそういうところに就職したり、あるいはアカデミアに行ったりとか、割とキャリアが見えやすいというところがあって、それであんまり議論の対象になってこなかったのかなという感じはします。恐らく今、日本社会全体としては今、文科省で文系から理系の転換みたいにごく大学院で求めていると思うんですけども、結局、文系の人材というのがその専門性を十分に生かしてない。例えば大学で学部で経済学を学んで、それがその次、どこに行くのかという、恐らくその学部への学問というのがなかなか社会に生きていかないと、すごい強い問題意識を持っていると思いますし、特に AI の普及によって、この辺りの職種自体が危ないんじゃないかということがあるので、なので今、そこは特にフォーカスされているのかなというふうに個人的には感じていいです。

堀江 今のご質問を伺って、なるほどなと思って伺ってたんですけども、私自身が前は立命館高校の校長の仕事もしていたときに、あそこの理系教育ですね、スーパーサイエンスの取り組みにも関わっていたことがありました。そこで理系人材育成みたいなことを考えたときに、例えばグローバルにいろんな人とチームを組んで共同研究をし

ていく力であったりとか、プロジェクトを推進していくコミュニケーション能力であったりとか、いろんないわゆる理系知識以外のスキルであったり、指定であったりというものが、その人が長く理系人材と成長していく上で必要だということが非常に重要だと思ってやっていました。そこで言われていた素養というものが、今回の Education 2030 で言われていることとかなり合致するなというふうに私は思っています。なので、理系人材育成には必要な要素なんだというふうに私は思うんですけども、ただそれを理科教育の中でやるのか、それとも理科教育のバックラインでやるのか、そこはもう多分本当に学校の事情によるところかなと思いました。

井上 私も今のお話、非常に興味深く聞いておりました。実はクリティカル・シンキングや他のことでも同じようなことがいえまして、例えば数学的な公式をクリティカルに眺めるのって相当しんどい部分があるんですね。だから、学問領域に応じた濃淡というのは必ず出てくると思うので、全体のバランスを教科全員で考えていくのが現実的なのかなと思います。

荒木 ありがとうございます。先生、よろしいでしょうか。

参加者 1 はい、ありがとうございました。

荒木 では他にご質問のある方はありませんでしょうか。

春日井 ありがとうございます。教職研究科の春日井と申します。白井さんのほうからはこれからの教育を考えるという中で、先ほどの議論にも少しあったんですけども、かたや今までの新自由主義、競争原理の教育があり、かたやPDCA サイクルの徹底があり、その辺りがそう脱却は簡単ではなくて、ものすごく根深く教員や保護者も含めて、やっぱり比較と競争のフィルターを通して子どもを評価して見てる。その辺りをどう脱却あるいはどう相対化していくかという、そこが本当

にないと、どんないいことを言われても難しいなというのを感じて。それは僕、今、ある学校にご縁があって、子どもたちが力は持っているけれども自己否定感が高いとか、それから保護者が求めていることは違うことを学校が求めているとか、そのはざままで子どもたちがとても悩みあぐねていると。だから、自分を知ろう、仲間を知ろうみたいなところからピアサポート入門みたいなことを頼まれてやりかけてるんですね。だから、その辺の理念と現実のギャップというのはかなり感じているところです。その辺りをどう考えていったらいいのかというのが一つです。

それからきょうのテーマがサブタイトルで、エージェンシーを育てるためについて書いてあるんですけども、指導要領三つ目の観点もそうですし、つながると思うんですけど、今までの適応主義、適応能力だけではなくて、社会をよりよく変革していく、変えていく、その主体にどうなっていくかという、そこがこれから大事な柱だ、教育のね。ということをお三方とも語られたと思うんですね。そのときに育てると言ってるけど、エージェンシーを育てると言ってるけど、いや、その前に既に育てんじゃないのって思うわけですよ。子どもたちの中に育てているものあって、いろんな意見を持っている。こんな学校にしたい、こんな先生になってほしい、こんな授業、やってほしい、こんな人間になりたいねということを持っている。それをちゃんと聞こうとしているかといってところが問われてるんじゃないかなと。いろんな機会に行ってきたときに、育てるという視点は、実は教師のそこに操作があったり、教師のフィルターを通してその意見を評価をして、そしてどういうふうに育てていこうみたいなことを言ってるけど、ちょっと違うんじゃないって、うさくさいんじゃないのっていうふうに思ったりするわけです。つまり、子どもたちの中で、今まで生きてきた中で、小中高、育てているいろんな思いがあって、そこをどう対話できるかっていう、そこをどううまく引き出せるか、その違いをどう共有できるかみたいなことが、これからの学校風土を変えていくとかじゃないかなっていう。チーム学校と言いつつ、ちっとも子どもが出てこないんですね。

いろんな多職種連携もそうだけど、でも子どももチーム学校の一員なので、子どもがどんな学校、どんな先生を求めているか。自分がどうなりたいたいと思ってるか。安心安全な学校だって、安心安全な学校って子どもがどう考えてるのか。教員の考えてることとのズレはあるんじゃないのって思うんですね。そこをきちんと議論して作っていくことが、本当に子どもを主体にした学校になっていくかなって、あるいは共同の場としての学校、教員も育ち合う学校になっていくかなと思ったりしてますので、白井先生とお二方にお伺いしたいと思います。

荒木 ありがとうございます。要は学校の現実と、理想と現実の問題。それから、エージェンシー、育ってるんじゃないか。発揮できないようにしてるんじゃないかって問題。この意見についてそれぞれ先生、どなたからでも。

井上 じゃあ、私から。まず一つ目のこれまでの歴史的な発展の中で、教育も急に旧来的なものから脱却はできないんじゃないかご指摘がありました。本当にそのとおりだなと思します。私、きょう質問しようと思ってしなかったんですけども、日本と社会が求める学力観にも同じことがいえるのではないかなと。たとえば灘校という学校は今のところ高い学力を持っている生徒が多いというふうに皆さん認識されている方が多いんじゃないかなと思うんですけども、少し記憶力が良くて、理数系が人より強くて、早熟で、そういう子たちを高い学力を持っているとするならば、多分、1世紀後の灘高校も賢い子がそろっているんだらうなと思します。でも海外も含めてその価値観が変わればどうでしょう。半世紀後、1世紀後、いわゆる世の中で今、現在進学校、高い学力を持っている生徒とされている学校がどういう姿になっているんだらうかというのを、先は読めないのは当然なんですけれども、白井さんに伺ってみたいかなと思しながら実は悶々しておりました。

二つ目は育てるという言葉について、私もちらっと違和感を覚えておまして、「育む」のほうが近いのかなという感じがしました。教員が生徒を

育てるのではなくて、生徒が自分自身の心や態度を育てていく。育てていくといってもゼロからではなくて、先生のおっしゃる通り、もう既にあると思うんですね。あるんだけれども、それを捉える側に問題があって、無いものにしてしまっている。持っているものを無いものとしてしまっている文化があり、そこは学校もまた例外ではないと思うので、私も自戒の念を込めて聞いておりました。

堀江 春日井先生、ありがとうございます。まず、1点目の理念と現実のギャップが大きいというふうを感じる、現場を見て言われていることは、本当、私もそのとおりだなと思っていて、立命館小学校では例えば息吹のことであったりとか、その他さまざまな、例えば対話と協働をやっていきましょうということであったりとか、考え方としては結構すつと理解いただくんですけど、それが行動として現れてきたりとか、それが習慣化していく、内実化していくみたいのところまでやっぱ時間がかかると思します。それはもうしょうがないかなと私は思っていて、頭で聞いて、すぐ言われてパッとできるようなことだったらもう先にできているはずのことで、それがそうならないからこそそういう考え方を導入して、みんなでちょっとずつ変えていきましょうというプロセスになると思うので、本当、先生、おっしゃるとおり、大事なはそのギャップをちゃんと、ギャップと向かい合っていくというか、ギャップを認識して、そこをどう埋めていこうか、私たちに何が足りないのかということを集団として根気よくやっていくことが必要かなというふうに思します。

もう一つ、エージェンシーを育む、育てるという言葉なんですけど、私は、私の中ではエージェンシーは高めるものかなと思っていて、なので既に存在するものだと、私も子どもたちの中にあるものだというふうには思っています。ただそれが、さっき言った制服のことを言いに来た子なんかは比較的それを発揮しやすい子だったと思うんですけども、必ずしもそういう経験がある子ばかりではないし、意見をちょっと言ってみただけ周りの大人からもすぐ遮断されてしまって、それ、

二度と言わないみたいな経験をしている子も恐らくいると思うので、私たちの、担任先生とか教科を持ってらっしゃる先生は日常的なことなので、本当大変だとは思いますが、少なくとも私自身はそういうチャンスがあったときには、エージェンシーの芽が見えたときにそれを引き出すというか、高めるといった、そういう言動はしていけたらいいなというふうには思っています。それは子どもだけじゃなくて先生がたに対しても、保護者の方に対しても同じだというふうに感じています。

白井 先ほどご指摘をいただいたように、エージェンシーに基づいて学校が変わっていくかどうかなんですけれども、ハーグリーブス先生の第一の道から第三の道は大体 30 年ぐらいのスパンで起きていると思います。第一の道、公教育の無料的な拡大、戦後、大体 30 年、高度成長期から 1970 年代ぐらいまで、それから競争原理的に変わってきて、それが恐らく 2000 年代の初頭ぐらいまで。今がまさに PDCA サイクルの時期だと思うんですけど、それが 2010 年ぐらいから現代に至ると感じだと思うんですけども。もし過去が、第一の道、第二の道が 30 年スパンだとしたら後 20 年ぐらい PDCA が続くと。20 年じゃない。あと 10 年ぐらい続くかもしれません。その次にエージェンシー主体の時代が来るんじゃないかというのは一つの予言なんですけれども、それを、スパンを後 10 年待つのか、それともそれを早めることができるのかというのは、まさにわれわれに課せられているようなことなのかなと思います。

エージェンシーは OECD のほうでもよくスチューデント・エージェンシーとティーチャー・エージェンシーという言い方で、生徒と先生のエージェンシーだけに若干矮小化されてしまっていて、私はそこは個人的に不満を持っています。さっき先生、チーム学校というお言葉をおっしゃられましたけれども、当然先生だけじゃない。例えば学校事務職員の方にしても、給食調理員の方にしてもですね、保護者の人ももちろんなんですけれども、それぞれがエージェンシーを発揮していただかなくちゃいけない、先生と生徒のエージェン

シーだけ発揮しようということは全くないと思います。そもそもエージェンシーという言葉は、いろんな方が使われていますけれども、多分一番有名なのは、経営学の世界のピーター・ドラッカーが言っている企業の中でのチェンジ・エージェント。企業は硬直的ではない。その中で変革をできるような担い手の人がチェンジ・エージェント、エージェンシーを発揮する人というふうに言っていることでもありますので、やっぱり社会全体でしっかりと考えて、そのことをアクションとして動かせる人というのを育てていくと、それに尽きるかなというふうに住じます。

荒木 ありがとうございます。春日井先生、よろしいでしょうか。

春日井 はい。

荒木 では、時間になりましたので、最後、先生が一言ずつ感想というか、まとめの言葉というか、伝えていただいて、それでこの会、締めたいと思います。

井上 エージェンシーという言葉は知ってはおりましたが、こういう機会を頂かなければ真剣に向き合えなかった概念だと思います。もちろん私個人でできることはたくさんあると思うんですけども、次はぜひ本務校や、あるいは自分が受け持っている大学などの教育にも生かしていきたいと思いました。ありがとうございました。

堀江 本日はありがとうございました。立命館小学校でやってきたことをちょっとメタ的に、概念的に振り返るすごくいい機会になったなというふうに思っています。今後、もう少しさらに学校づくりを進めていって、新しいカリキュラムのことであつたりとか、ホームページ等々で、また世間に出していける日が近いうちに来るかなと思いますので、またご覧いただいて、いろいろ感想やご意見をいただけたらありがたいと思います。本日はありがとうございました。

白井 きょう、エージェンシーとか、また井上先生から IB の話をご紹介いただいたり、また堀江先生から立命館の話があったりとか、情報がかなり過多になってしまったかもしれないので、私は1回、全部、「ラーン、アンラーン、リラーン」と言いますが、アンラーンしていただいてもいいのかなと思ってます。ただその中で、先生がたが普段の仕事の中で、ひょっとしたらあそこのコンセプト、役立ちそうだなとか、立命館のこの取り組み、あるいは IB のこのコンセプトが役立ちそうだな、あるいはこのエージェンシーの概念、役立ちそうだなと良い意味で引っかかるころがあったら、そのときに思い起こしていただくぐらいがちょうどいいのかなというふうに思っています。ぜひご負担のない形で参考にさせていただければと思っています。

荒木 ありがとうございます。今回、エージェンシーという一つのキーワードの下に話を広げていったのですが、次の学習指導要領の改訂でエージェンシーという言葉は入ってこないだろうと言われていますが、エッセンスというものは今後、大事にされていくんじゃないかと思っています。要は、よりよい変化を起こすために子どもたちが自分で行動するということだと思うんです。その行動する子どもたちの邪魔にならないように、子どもたちと行動しやすい環境を大人がどれだけつくっていけるかということが、これからの教育につながる一つの課題になるのかなというふうに感じています。きょうは本当にお忙しい中、おいでいただきありがとうございました。これでシンポジウムのほうを終了いたします。ありがとうございました。